







偶然にも新人ジョッキー

前日の古馬500万(1分11秒4)が稍重、同日の古馬1000万(1分10秒5)が良馬場なので、ドウカンヤマ(中山6R)の3走前(稍重)がどのぐらいの馬場状態だったのかを判断するのは難しいが、2歳未勝利で1分11秒1は速いはず。その後は東京千六、千四で失速しているが、中山千二なら買える。



桜花賞は4月10日。皐月賞は4月17日。クラシックがもう1カ月後に近づいてきた。

牝馬は2月のクイーンCを驚異の「1分32秒5」で独走したメジャーエンブレムに、土曜のチューリップ賞組がどこまで接近できるかが焦点。一方、牡馬は候補があふれている。魅力的な馬が多い。

3歳になり、ロジックライ(シンザン記念)、プロフェット(京成杯)、サトノダイヤモンド(きさらぎ賞)、先週のレインボーライン(アーリントンC)が重賞勝ち馬に加わったが、昨年夏のロードクエスト(新潟2歳S)からここまで、重賞を制した男馬は(短距離を含め)15頭。

まだ、重賞2勝馬はいない。今週の弥生賞を、マカヒキ、タイセイサミットあたりが勝つと、いまのところ評価が高いのは、きさらぎ賞のサトノダイヤモンドだが、ふつうは候補としてランキングに名を連ねて不思議ない。路線重賞の勝ち馬が、マイル戦指向の馬を別にしてさえ、10頭以上にも達する。

同じ中山6Rのシェアードは3走前に中山千二1分12秒5。同日の3歳500万が1分12秒4で、当時2着のシゲルサケガシラは1分12秒5。前走、東京千四で失速したが、中山千二なら巻き返し濃厚。

ここまで考えてから騎手を確認したら、偶然(本当)ドウカンヤマもシェアードも今週デビューの新人だった。新人だから買う派でも新人だから買わない派でもないが、ダート千二で3キロ減というのは大きなアドバンテージ。応援馬券ではなく、真剣に2頭の馬連を買う。

候補は多い方がいい。父ディーンパクトと同じように新馬若駒S↓弥生賞の日程を組んできたマカヒキに注目。

スローだったとはいえず、前回2000mはマカヒキ自身、最後の2ハロンを(推定)10秒7-10秒6で直進し、上がり32秒6だった。

今回は挑戦者の立場。ルメール騎手だとエアスピネル、リオディーズより前に位置する可能性はある。雨は気になるが、だれが一番切れるだろう。

数年前は『ドイツ牝系』が大きな注目を集めたが、今年のサトノダイヤモンドは、英国から南米アルゼンチンに渡って大繁栄した一族の出身。

そして今週のマカヒキも、そのファミリーは英国から数代前にアルゼンチンに移り、南米で発展した牝系出身である。

ドイツ牝系がタフで頑強というなら、アルゼンチン牝系もまたタフな活力にあふれている。

この2頭、ともにファミリーナンバー「1号族」で、もう親類でも仲間でもないが、20代くらいさかのぼると1788年生まれ、の牝馬ブルネラを同じ牝祖にもっている。だから、クラシックなのである。

(柏木)